



# Pure Pacific 純 No.206 パ Nov.2019

純パの会会報『純パ』第206号

2019年11月30日発行 / 発行: 純パの会

## 2019年日本シリーズを回顧する 松場 重樹

あまりに呆気ない幕切れであった。対戦相手に積年の「につき読売」の姿はどこにもなかった。ジャイアンツに勝利したことにより「福岡ソフトバンクホークス」として、セリーグからの日本シリーズ制覇を達成したというのに、まったく心が満たされなかった。

個人的に今年の日本シリーズは、仕事の都合で福岡の第2戦と東京の第3戦を時限観戦したのみで、どちらもホークスの勝利を見届けることができなかった。特に第2戦は0-0の7回裏途中で席を立った直後、ヤフオクドーム横を通過しながらタクシー車中のラジオで松田宣浩の先制スリランを聴くというありさまだった(図らずも運転手さんと「熱男ーっ!!」を唱和することに)。そんな消化不良が空虚な思いをさらに強くしたのかも知れない。

19年前の同じ対戦。東京ドームで第1戦と第2戦を観戦したが、場内は試合前からずっと地鳴りがしているような異様な雰囲気、軽い乗り物酔いになったような感覚に襲われた。そんな状況だったので試合終了後、ホークスの勝利に乾杯などという心境になれなかった。

それにひきかえ今回はそんな緊張感が微塵もなく、場内はいつもの東京ドームのままであった。この数年ですっかり顔ぶれが変わったジャイアンツの選手たちはみな小粒に映った。例えば19年前

の3番・高橋由伸、4番・松井秀喜、5番・清原和博というクリンナップに対し、3番・丸佳浩、4番・岡本和真、5番・阿部慎之助では迫力不足は否めない。

ホークスはV逸の一因になったレギュラーシーズン最終盤の大失速から、クライマックスシリーズが開幕したタイミンでチーム状態が持ち直したのが何よりも大きかった。Y・グラシアルと今宮健太を筆頭に鳴りを潜めていた打線が復調。疲労が蓄積していた高橋順平、嘉弥真新也、L・モイネロ、甲斐野央、森唯斗らブルペン陣にロングリリーフが可能なら石川柊太が復帰。長谷川勇也、川島慶三、高谷裕亮、周東佑京らバイプレーヤーもきつちりとその役目を果たした。

ジャイアンツは日本シリーズ未経験の選手が大半を占めていたとはいえ、あまりにもミスが多いプレーは球界最高峰の対戦に不似合いではなかったか。

ハイレベルの試合を常に強いられるレギュラーシーズンの方がよっぽどしんどかった(ん? どこかで聞いたことのあるセリフだ)。80年代から90年代前半にかけてのライオンズと違って、ツツコミどころの少なくないホークスの野球に太刀打ちできないさまは、立ち位置の違いを越えて不憫にさえ思えた。

あゝあ、もっと歯ごたえのある試合が観たかった!